

# 恋衣

山川登美子・増田雅子・與謝野晶子

青空文庫



詩人薄田泣菫の君に捧げまつる



繪  
画  
目  
次



詩目次

白百合

みをつくし

曙染

君死に給ふこと勿れ

恋ふるとて

いかが語らむ

鼓いだけば

しら玉の

冥府のくら戸は



白百合

山川登美子

髪ながき少女とうまれしろ百合に額ぬかは伏せつつ君をこそ思へ

聖壇せいだんにこのうらわかき犧にへを見よしばしは燭しよくひやくを百にもまさむ

そは夢かあらずまぼろし目をとちて色うつくしき靄にまかれぬ

日を経なばいかにかならむこの思たまひし草もいま蕾なり

射あつべし射あてじとても矢はつがへ金の桂きんに額ぬかまける君

恋せじと書かせたまふか琴にしてともにと植ゑし桐のおち葉に

こがね雲ただに二人をこめて捲けなかのへだてを神もゆるさじ

手もふれぬ琴柱ことぢたふれてうらめしき音をたてわたる秋の夕かぜ

何といふところか知らず思ひ入れば君に逢ふ道うつくしきかな

このもだえ行きて夕のあら海のうしほに語りやがて帰らじ

この塚のぬしを語るな名を問ふなただすみれぐさひとむら植ゑま  
せ

紅べにの花朝々つむにかずつきぎ待つと百日もゝかをなぐさめ居らむ

ひとすぢを千金せんきんに買ふ王わうもあれ七尺みどり秋のおち髪

わが息いきを芙蓉の風にたとへますな十三絃をひと息いきに切きる

またの世は魔神まがみの右手の鞭うばひ美しくしき恋みながら打たむ

袖たてて掩ひたまふな罪ぞ君つひのさだめを早うけて行かむ

うつつなく消えても行かむわかき子のもだえのはての歌ききたま  
へ

わすれじなわすれたまはじさはいへど常のさびしき道ゆかむ身か  
われゆゑに泣かせまつりぬゆるしませよわき少女にいま秋のかぜ

わが胸のみだれやすきに針もあてずましろききぬをかづきて泣き  
ぬ

狂へりや世ぞうらめしきのろはしき髪ときさばき風にむかはむ

裾きえて蕞すゐのまなかに立つと見ぬあめ天の香をもつ百合花ゆりばなのうへ

うるはしき神の旅路と答いらへまつりともづな解かむ波のまにまに

をみなへしをとこへし唯うらぶれて恨みあへるを京の秋に見し

(明治三十三年の秋)

にほひもれて人のもどきのわづらはし袖におほひていだく白百合  
さらば君氷にさける花の室恋むろなき恋をうるはしと云へ

その涙のごひやらむとのたまひしとばかりまでは語り得れども

その浜のゆふ松かぜをしのび泣く扇もつ子に秋問ひますな

狂ふ子に狂へる馬の綱あたへ狂へる人に鞭とらしめむ

薄月に君が名を呼ぶ清水かけ小百合ゆすれてしら露ちりぬ

とことはに覚むなと蝶のささやきし花野の夢のなつかしきかな

聴きたまへ神にゆづらぬやは胸にくしきひびきの我を語れる

手づくりのいちごよ君にふくませむわがさす紅べにの色に似たれば

里の夜を姉にも云はでねむの花君みむ道に歌むすびきぬ

紅梅にあわ雪とくる朝のかどわが前髪のぬれにけるかな

なにとなく琴のしらべもかきみだれ人はづかしく成れる頃かな

心なく摘みし草の名やさしみて誰におくると友のゑまひぬ

われ病みぬふたりが恋ふる君ゆゑに姉をねたむと身をはかなむと

髪あげて挿<sup>さ</sup>さむと云ひし白ばらものこらずちりぬ病める枕に

野に出でてさゆりの露を吸ひてみぬかれし血のけの胸にわくやと



世は下したにいかにも強ひようるはしき日知らで土鼠土もぐらを掘るごと

ぬる蝶のなさけやさしみ瓜畑のあだなる花もひとめぐりしぬ

雲きれて星はながれぬおもふこと神にいのれる夕ぐれの空

かがやかに燭しよくよびたまふ夜の牡丹ねたむ一人ひとりのうらわかきかな

かずかずの玉の小琴をたまはりぬいざうちよりて神をたたへむ

(新詩社をむすび給へる初に)

指の環を土になげうちほゝゑみし涙の面のうつくしきかな

うるはしきマリヤを母とよびならひわかき尼ずみ寺に年へぬ

誰がために摘めりともなし百合の花聖書にのせて禱りてやまむ

くちなはの口や狐のまなざしや地のうへ二尺君はちやう寵の子

よわき子はあめ天さす指も毒に病むさか栄えを祝へ地なるしこぐさ醜草

いもうとの憂うきがみ髪かざる百合を見よ風にやつれし露にやつれし

(晶子の君に)

垣づたひ萩のしたゆくいさき水にはちらふ頬をばひたしぬるかな

うけられぬ人の御文みふみをなげぬれば沈まず浮かず藻にからまりぬ

くちぶえに小羊こひつじよびて鞭ふりて牧場まきばに成りし歌のふしとる

木屋街は火ほかげ祇園は花のかげ小雨に暮るゝ京やはらかき

世のかぜはうす肌さむしあはれ君み袖のかげをとほにかしませ

利鎌<sup>とがま</sup>もて刈らるともよし君が背の小草のかずにせめてにほはむ

いろふかくゑまひこぼるこの花よたまひし人によく似たるかな

わが舞へる扇の風に殿<sup>との</sup>の火を百<sup>も</sup>の牡丹のゆらぎぬと見る

いかならむ遠きむくいかにくしみか生れて幸<sup>さち</sup>に折らむ指なき

(以下十首人に別れ生きながらへてよめる)

地にひとり泉は涸れて花ちりてすさぶ園生に何まもる吾

虹もまた消えゆくものかわがためにこの地この空恋は残るに

君は空にさらば磯回いそわの潮とならむ月に干ひて往ぬ道もあるべき

待つにあらざ待たぬにあらぬ夕かげに人の御車みくるまただなつかしむ

今の我に世なく神なくほとけなし運命さだめするどき斧ふるひ来よ

燃えてくくかすれて消えて闇に入るその夕ゆふばえ榮えに似たらずや君

帰り来む御魂と聞かば凍る夜の千夜ちよも御墓の石いだかまし

おもひ出づな恨に死なむ鞭きざすの傷秘めよと袖をとめの少女に長き

夕庭のいづこに立ちてたづぬべき葡萄つむ手に歌ありし君  
（以上）

みてづからひと葉つまませこのすみれ君おもひでのなさけこもれ  
り

花さかばふたりかざしにさして見むこのすみれぐさ色はうつらじ

あたらしくひらきましたる詩の道に君が名讃<sup>た</sup>へ死なむとぞ思ふ

わが手もて摘みてかぎせるひと花も君に問はれて面染<sup>おも</sup>めにけり

いづこ踏みいかに帰らむちる花は山をうづみぬ我をめぐりぬ

誰がためにつくる花環とほほゑみて花の名をさへ問ひたまふかな

手づくりの葡萄の酒を君に強ひ都の歌を乞ひまつるかな

迎へ待つ君は来まさずわが駒に百合の花のせ綱ひく夕野

ほほゑみて火焰ほのほも踏まむ矢も受けむ安きねむりの二人ふたりいざ見よ

それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ  
 (晶子の君と住の江に遊びて)

羽子はごよ毬よみな母君にかくされて肩かたあげ上あとの針目はりめさびしき

くれなるに金糸の襟の舞の子を三月画みつきにすと京にある君

紅筆べにふでにわづらひたまふ歌よりも雪の兔に目をたまへ君



見じ聞かじさてはたのまじあこがれじ秋ふく風に秋たつ虹に

きぬでまりましろきなりに春のきてかがる色いろいろいと糸みなもつれたり

たてかけし琴の緒ひくくひびきたり御袖のはしも触れじと思ふに

てずさびにつなぎし路のいと柳誰れその上をまたむすびたる

ちる花に小雨ふる日の風ぬるしこの夕暮よ琴柱ことぢはづさむ

春さむし紅き蕾の枝づたひ病むうぐひすの戸にきより啼く

瞳ひとみまだ栄はえに酔はすな春の雲と袖もておほふ雛のうぐひす

夕顔に片頬あたへしおごりびと妬たしと星も今ちかう降れ

飢ゑていま血なきに筆もちからなし人よ魔と書く文字ををしへね

みいくさの艦ふねの帆いかりづなに錨いかりづなに召せや千すぢの魔もからむ髪

ふる鏡霜に裂けたるこだまなし夜よがらす烏むせび黄泉よみにや帰る

かたつぶりひさしに出でし雨ふつ日瓦にさきぬなでしこの花

たもち得ぬ才はたとへばうまぎけの破れし甕かめにも似たるこの人

ましら羽の鳥に啣くます花ひとつ武蔵のあなた十里におちよ（上  
総なる林のぶ子の君を懐ひまつりて）

髪なでて鏡ゆかしむ夜もありぬ夢にや摘まむしろ百合の花

わが袖も春のひかりの帰らじや牡丹き剪きらせて鼓つづみに添へば

雲に見る秋のうれひを葉に染めて泣くにしのぶに陰よき芭蕉

扇なす彩羽あやはの孔雀鳥の王おごりの塵を吹く春のかぜ

大原女おはらめのものうるこゑや京の町ねむりさそひて花に雨ふる

おぼしまの牡丹の花に額ぬかたれて春の真昼をうつつなき人

幸さちはいま霽もやにうかびぬ夢はまたしづかに降りて君と会あひにけり

薔薇ばらもゆるなかにしら玉ひびきしてゆらぐと覚ゆわが歌の胸

せめてただ女神めがみの冠かむりしろ百合の花のひとつと光ひかりそへむまで

地にわが影空そらに愁の雲のかげ鳩とびよいづこへ秋の日往ぬる

虹の輪わの空そらにながきをたぐりませ捲かれて往なむこの二人ふたりなり

戸によりてうらみ泣く夜のやつれ髪この子が秋を詩に問ふや誰

歌あらば海ゆく雨に添へたまへ山に夕虹なびくを待たむ (上総)

の浜辺に夏を過ぐせるまさ子の君に)

夕潮に玉藻たまもよる音ねの秋ほそしさばかりをだに命なる歌

髪ながうなびけて雲はそぞろなり入日と風と恋をいどめる

鞭拍子むちびやうしやうやく慣れて南国なんごくの牧場まきばの春の草に歌よき

百合牡丹にんげんの花姫なほ足らずばひじりの恋よ野うばらも枕まけ

しら鳩も今むつまじく肩にきぬ君西びとの歌つづけませ

さりともとおさへて胸はしづめたれ夜を疑ひの涙さびしき

思あれば秋は袖うつひと葉にも涙こぼれて夕風黄きなり

いつはりの濁るなみだのかかりなばこの袖たちてまた君を見じ

秋かぜに御粧みけはひどの殿をすの小簾ゆれぬ芙蓉ぞ白き透き影にして

ゆふばえやくれなるにほいむら山あめに天の火が書く君得しわが名

ぬのぎれに瓦つつみて才さいはかる秤器はかりの緒にはのぼされにけり  
 (以下拾弍首さることのありける時)

おとなしく母の膝よりならひ得し心ながらの歌といらへむ

鑄られてはひとつ形のひと色の埴輪はにわのさまに竈出かまどでむか

ひとりにはあまりさびしき秋の夜と筆がさそひしまぼろしよ君

地にあらず歌にただ見るまぼろしの美しくしければ恋とこそ呼べ



書よみて智慧売る子とは生れざり蛇へびのうすぎぬ価ある世よ

いきづけば花とかをらむ思あり人のいのちの燃ゆる胸より

相ふれては花もうなづく浪も鳴る枯木からきあをき青木も山を焼きぬる

おもひでを又はなやぎてかざらばや指さす人に歌ひ興ぜむ

歌よみて罪せられきと光ある今の世を見よ後の千とせに

師と友とわれとし読みてうなづかば足るべき集しゅうと智者ちしや達に言へ

ぬ あなかしこなみだのおくにひそませしいのちはつよき声にいらへ

みをつくし

増田まさ子

しら梅の衣きぬにかをると見しまでよ君とは云はじ春の夜の夢

恋やさだめ歌やさだめとわづらひぬおぼろごこの春の夜の人

むつれつつ堇のいひぬ蝶のいひぬ風はねがはじ雨に幸さいちあらむ

飛ぶ鳥かわがあこがれの或るものかひかり野にすと思ふに消えぬ

歌ひとつ君なぐさめむちからなし鬢の毛とりて風にことづてむ

母恋ふる心わすれてあこがれぬやさしおん手のひと花ゆゑに

みやこ人の集びとのしをりとつみつれどふさひふさふかへでや楓のわか葉

なさけ未いまだよわきはげしきさだめ分かず酔へりとのみのこの子と  
知りぬ

かゝる夜の歌に消ぬべき秋あきびと人とおもふに淡うすき裳ももふさふかな

世にそむき人にそむきて今宵また相見て泣きぬまぼろしの神

われにまた山の鐘鳴るゆふべなり雫しづくや多き涙や多き

似つかしと思ひしまでよ菖蒲あやめきり池のみぎはを南せし人

あすこむと告げたる姉を門かどの戸にまちて二日ふつかの日も暮れにけり

髪ときて秋の清水にひたらまし燃ゆる思の身にしきるかな

うらみわびこの世に痩せし少女子のひくきしらべをあはれませ君

みふみ得しその夕より黒髪のみだれおぼえて涙ぐましき

瘦せ指に小鬢こびんのぬけ毛からめつつさてこの秋にふさふ歌なき

人の名も仏の御名も忘れはて籠に色よき野花のばなつみぬる

しら梅の朝のしづくに墨すりて君にと書かば姉にくまむか

二十とせは亡き母しのぶ夢にのみ光ほのかにさすと覚えし

わりなくも琴にのぼせて恋得つと御歌みうたのぬしに告げば如何ならむ

つらき世のなさけいのらぬわれなれど夕となれば思あまりぬ

須磨<sup>すまご</sup>琴のわかきわが師はめしひなり御胸<sup>みむね</sup>病むとて指の細りし

ねいき細きこのわがのどに征矢<sup>そや</sup>ひきて夢路かへさぬ神もいまさば

川くまのふたもと櫟<sup>いちひ</sup>かげみれば猶も君見ゆわれ遠ざかる

わりなくも君が御歌に秋瘦せてよわき胡蝶の羽<sup>は</sup>もうらやみぬ

はかり得ぬ親のこころをかへりみずゆるせと君にもものいひてける

わが面おもの母にに肖るよと人いへばなげし鏡のすてられぬかな

ちる花のしたにかさねてまかせたり君が扇とわが小鼓こつづみと

紅梅の真垣のあるじ胸をいたみ泣くを隣りに小琴とききぬ

みなさけのあまれる歌をかきいだきわが世の夢は語らじな君

君によき水際みぎはや春の鳥も啼く細き柳は傘にかかりぬ

その御手にはほそきかひなをゆるしませくづるる浪のはてしなくと



も

京の春に桃われゆへるしばらくをよき水ながせまろき山々

夢に見し白き胡蝶の忘れ羽かあらず小百合さゆりのそのひと花か

泣きますな師をなぐさめむすべ知ると小百合つむ君うるはしきかな  
(以上二首は登美子の君に)

つらきかな袖に書いてもまゐらせむ逢はで別るゝ歌のみだれよ

なにとなきとなり垣根の草の名も知らばやゆかし春雨の宿

あづま<sup>ど</sup>人が扇に染めし梅の歌それおもひでに春とこそ思へ

この世をもはては我身も咀はるる竹ゆく水に沈む日みれば

袖おほひさびしき笑みの前髪にふさへる花はしら梅の花

うぐひすを春の桜におほはせて水の月さす夏の夜きかむ

山かげの柴戸をもれししはぶきに朝こぼれたりしら梅の花

われ思へば白きかよわの藻の花か秋をかなたの星うけて咲かむ

桃さくらなかくく川のこいたばし小板橋春かぜ吹きぬ傘と袂に

よき里と三とせ御筆みふでのあとに見き今宵虫きくうす月の路  
 (渋谷にて)

君待たせてわれおくれこしこしたぢ木下路ときふの蔭の花をながめぬ

花こえてその花をりて垣にそふ夢のゆくへの家うつくしき

初秋はつあきや朝睡あさいの君に御湯みゆまるる花売かどくるま門かどに待たせて

奇しきもの指につたへて胸に入る神も聞きませ七つの緒をごと琴

こは天あめか人のさかひかまた逢ひぬ飽かずと泣きてわかれにし君

まれびとに椎の実まるる山ずみの静なる日や秋の雨ふる

わが袖に掩ひややらむかれ／＼の野花のぼなはなれぬ蝶のましろき

わづらひかこれうらぶれか春のうすれ暮うするる夕ゆふばえ栄を見る

みづいろの帯ふさはずやみだれ髪花のしろきに竹の青きに

うつくしき水に小橋に名おはせて里みつきみ三月うらわかき人

その神のみすがた知らず御名みな知らず夢はましろの百合の園生に

まぼろしにうつらむものかわがおもひ紅きむらさき色のさま／＼

うたたねの額ひたひにかづく春の袖ぬ繡こひ来牡丹とこがねの蝶と

今はただ歌の子たれと願ふのみうらみじ泣かじおほかたの鞭

うつつなき春のなごりの夕雨にしづれてちりぬむらさきの藤

心とはそれより細き光なり柳がくれに流れにし螢

あゝ君よ心とわれと別れきぬ深山に似たる秋かぜの家

花や雨や野の紫や春のひと酔ひてしばしの夢まどろまむ

海棠の室むろに歌かく春の宵ものあくがれの酒われに濃き

栄はえとくやもろしと云ふや君よ人よ蝶のむくろに春をうらなへ

このゆふべ色なき花にまたも泣くえにしつたなき春のわすれ子

髪あらへば髪に花さき山みづにさくらいぎよふ清滝の里

野の虹のかたへうすれて鐘なりぬ柳にしばしたたずむや誰

奥の院の夕の壁に歌も染めず白き桔梗をたをりて下りぬ<sup>お</sup>

おきてたるさとしかしこみ国出づと母の御墓の花に泣く人

ながれゆく汝れよ笹舟しばしまてこの歌染めていのち与へむ

紅蓮<sup>べにはす</sup>の花船ひとつ歌のせて君ある島へ夕ながさむ

夏くさを一里わけたる君がかど昨日も笑みてただに別れぬ

衾<sup>ふすま</sup>ぬけて戸をくる京の雪の朝この子が思ひ詩によみがへる



病む鳥を籠にあはれむ夕ばしら憂かりし春の又も眼に満つ

簾背すだねに春の眼によき玉おぼしま比良のむらさき二尺に足らぬ

おとろへにひとり面瘦せ秋すみぬ山の日うすく銀杏いてふちる門かど

わが友の照る頬の春よ淀川のみどりあふれて君が門かどゆけ  
 二首京にありしほど浪華の友に）  
 （以下

肩あげによき頬のほひ君が春を才に耻もつわれ京の姉

ふと倚るに見たるは清き高きまどひその昨日きのふもつしら梅の花

拍つ手ここに御池みいけの緋鯉なれつるよ一人ひとりを京の春の子老いな

まぼろしに得たるみすがたたどる眼にいつしか霧の枯野を得たり

わが魂を武蔵やいづこ水よ引け夜よるの二百里花ふらしめよ

御手みてもろともそよ片山のこがらしにまぎれ消ぬべき我ならばとも

おんすくせわかき御み尼あまに泣かれけり堂の夕ゆふ寒さむわが袖そでまるる

寒菊に涙さびしき夕別れせつなき別れ西の京にして

わがなれぬ寒さの袖にまたも雪風は愛宕の北のおろしよ

そのおもぎし姉に似たるにまた泣きぬ雨のまくらをふた夜の人や  
 (弟と京にてよめる)

知らざりしほころべば黄に紫にきのふ垣根に名なかりし草

舟にして蓮きる御手の朝うつくし十九を滋賀の水によき君  
に)  
(友

なぐさめむ人なき寮の夜のさくらおなじ愁の君にちるべき

夜の柳ひくき浪華の水なりき歌うて過ぐる君とのみ見し

笛を追ひてゆふべ船やる水一里蓮はすの香のせて櫓にやはらかき

なぐさみぬ都の旅の秋の身も歌に笑む夜は足る人のごと

李すもゝちる京の夕かぜ又も泌しむひととせ見たる美しくしき窓

ゆく春をひとりしづけき思かな花の木間このまに淡あはき富士見ゆ

江戸川のさくら黄ばめる朝靄にわかれし人をえこそ忘れね

春雨に山吹うかぶ細ながれみどりこなたへ君をいぎなへ  
 京より西の京の友へ）  
 （東の

秋の日のこがねにほへる遠木とほこだち立そこにか母のありかたづねむ

磯にして君を思ふに清き夜や歌とは云はじ浪に得し珠  
 首上総の海辺にて）（以下二

汐あむや瑠璃を斫りたる桂なし海松みるぶさささとも額ぬかふれにける

とほく行く身にたまはりぬ琵琶だきて秋の雲みる西のみづうみ

この世にはあらずと知りしかたらひをしづかに思ふ森かげの道

春うたふ小鳥追ひ打つ世と知らずあくがれ出でし花の木こづたひ

（以下拾首さることにふれて）

うるはしきゆめみごこちやこのなさけこの歌<sup>あめ</sup>天の母にそむかじ

彼の天<sup>あめ</sup>を知らぬ土鼠<sup>もぐら</sup>の宮守<sup>みやもり</sup>にわが歌悪しと憎まれにけり

耳しひしひじりはわかきうぐひすのよき音<sup>ね</sup>は問はず籠<sup>こ</sup>に閉ぢての  
み

われ咀<sup>く</sup>ひ石のものいふ世と知りぬつめたき声に心こほりぬ

みなさけかねたみか仇かあざけりかほほゑみあまた我をめぐれる

歌はみな天あめのひかりにあこがれぬ母なき国に栖すみわびぬれば

わが歌は鴿はとにやや似るつばさなり母ある空へ羽搏はうち帰れと

大神のみまへめぐりて立たむときかしこき人ら今日を忘るな

わきて身にしむやこの秋もみぢ葉のこきひと葉すら咀はれの色



## 曙染

與謝野晶子

春しゆんじよせう曙抄しよせうに伊勢をかさねてかさ足らぬ枕はやがてくづれけるか  
 な

あゝ野の路みち君とわかれて三十歩ほまた見ぬ顔に似る秋の花

ほととぎす聴きたまひしか聴かざりき水のおとするよき寝覚ねざめかな

海恋し潮しほの遠鳴りかぞへては少女となりし父母の家ちはは

加茂川に小舟をぶねもちるる五月雨さつきあめわれと鼓つづみをあやぶみましぬ

鎌倉や御みほとけ仏なれど釈迦牟尼びなんは美男びなんにおはす夏木立かな

おもはれて今年ことしえうなき舞まごろも篋はこに黄金こがねの釘くぎうたせけり

養はるる寺てらの庫裏くらなる雁がんらい来紅輪袈裟こうわげさは掛かけで鶏とりおはましを

ほととぎす治承ちしやう承寿じゆえい永えいのおん国母こくも三十さんじゅうにして経きやうよます寺

わが恋は虹にもまして美しきいなづまとこそ似むと願ひぬ

聖<sup>せい</sup>マリヤ君にまめなるはした女<sup>め</sup>と壇<sup>だん</sup>に戒<sup>かい</sup>えむ日も夢みにし

頬<sup>ほ</sup>よすれば香<sup>い</sup>る息<sup>いき</sup>はく石の獅子ふたつ栖<sup>い</sup>むなる夏木立かな

髪に挿<sup>さ</sup>せばかくやくと射る夏の日や王<sup>わう</sup>者<sup>しや</sup>の花のこがねひぐるま

紅<sup>べ</sup>させる人<sup>にん</sup>衆<sup>じゆう</sup>おほき祭<sup>まつり</sup>街<sup>まち</sup>きやり唄<sup>うた</sup>はむ男と生<sup>な</sup>ひぬ

紅あけの緒きんこの金鼓きんこよせぬとさまさばやよく寝ねる人をにくむ湯ゆの宿

今日けふのむかし前髪まへかみあげぬ十三じゅうさんを画えにせし人に罪つみありや無し

誰たれが罪つみぞ永劫えうがふくらきうづしほなかの中にさそひし玉たまと泣なくひと

里さとずみの春雨はるのこふれば傘かささして君きみとわが植うう海棠かいとうの苗なえ

ほととぎす過ぎぬたまわうそんく王孫おうそんの金きんの鎧よろいを矢やすべるものか

さくらちる春はるのゆふべや廃院はいゐんのあるじ上じやうらふ 藤ふじ 赤裳あかもひいて来こ

花のあたりほそき滝する谷を見ぬ長谷の御寺の有明の月

掛け香のけむりひまなき柱はしらをば白き錦につつませにけり

三井寺や葉わか楓かへでの木下こしたみち石も啼くべき青あらしかな

棹さをとりの矢がすり見たる舟ゆるゑに浪も立てかししら蓮の池

姉なれば黒き御戸帳みとちやうまづ上げぬ父まつる日のもの冷つめたき

更くる夜をいとまたまはぬ君わびず隅にしつゞみのびて鼓緒しめぬ

きり／＼す葛の葉つづく草となり笛ふく家と琴ひく家と

蓮はすを斫り菱の実とりしたらひぶね 盥舟なその水いかに秋の長雨ながあめ

青雲あをぐもを高吹く風に声ありて讚じたまひし恋にやはあらぬ

斯くは生おひてふりわけ髪けいの世も知らず古りし磬しんうつ深院あらいのひと

春日かすがの宮わか葉かのなかのむらさきの藤ふじのしたなる石いしの高麗狗こまいぬ

第一の美女びぢよに月ふれ 千人せんじんの姫ひめに星せいふれ 牡丹きやう饗やうせむ

このあたり君が肩よりたけあまり草ばな白く飛ぶ秋の鳥

家いへ 鼬いたち 尾おたるる相さうのむかしがほや瓜うりひとめぐり嗅かぎても徃いぬる

才さいなさけ似にざるあまたの少女見みむわれをためしに引くと聞くゆゑ

わが恋はいさなつく子か鮪しび釣りか沖の舟見て見てたそがれぬ

白きちさき牡丹おちたり憂かる身の柱はなれし別れの時に

星よびて地にさすらはす 洪こうりやう量やうの人と思ふに批ひもうちがたき

花に見ませ王わうのごとくもただなかに男をは女めをつつむうるはしきしべ蔬

在まさぬ二夜名ふたよしらぬ虫を籠こに飼ひぬ寝がての歌は彼れに聞きませ

耳かして身ほろぶ歌と知りたまへ画ならばただに見てもあるべき

ややひろく廂ひさしだしたる母屋もやづくり木の香にまじるたちばなの花



祭の日 葵あふひばし 橋はし ゆく花がさのなかにも似たる人を見ざりし

精好せいこうの紅あけとしら茶の金欄きんらんのはりまぜ箱に住みし小鼓こつづみ

杉のうへに茅渟ちぬの海見るかつらぎや高間たかまの山に朝立ちぬ我れ

八月や水蘆みづあしいとうたけのびてわれ喚びかねつ馬あらふひと

夕かぜの河原へ出づる小棧橋こさんばしいそぎたまふにまへざし落ちぬ

眉つくるちさき盥に水くみて兔あらふを見にきまさぬか

名 今日<sup>けふ</sup>みちて今日たらひては今日死なむ明日<sup>あす</sup>よ昨日<sup>きのふ</sup>よわれに知らぬ

木曾の朝を馬子<sup>まご</sup>も御主<sup>おしゆう</sup>も少女<sup>をとめ</sup>笠鞍<sup>がさくら</sup>に風ふくあけぼの染に

月あると同車いなみしとが負ひて歌おほくよむ夜のほととぎす

むらさきの蓮<sup>はす</sup>に似ませる客<sup>まろうど</sup>人や荷葉<sup>かえふ</sup>の水に船やりまつる

蚊やりしばし君にゆだねしけぶりゆゑおぼろになりし月夜と云ひぬ

紅べにしほり緋むくなでしこ底くれなる我にくらべて名おほき花や

わが命めいに百合からす羽の色にさきぬ指さすところ星は消ぬべし

夕ゆふげ粧はひて暖簾のれんくぐれば大阪の風簷かざしふく街にも生ひぬ

五月晴つゆばれの海のやうなる多摩川や酒屋の旗もろこしや黍こしのかぜ

高つきの燭しよくは牡丹に近うやれわれを照すは御冠みかむりの珠

欠くる期ごなき盈つる期ごあらぬあめつちに在りて老いよと汝なもつく  
られぬ (秀を生みし時)

たなばたをやりつる後のちの天の川しろうも見えて風する夜かな

蓮はすきると三寸とほき花ゆゑにみぎはの人のさそはれし舟

憂ければぞ爪つめに紅べにせぬ夕ぐれを色は問はずて衣きぬもてまるれ

舟にのればえうらく瓔珞はすゆらぐ蓮はすのかぜ掉こんりようのひとりは 袞こんりよう 竜りゆうの袖

しら蓮からきや唐木からきくみたる庭にはぶね舟ぢんに沈ぢんたきすてて伯父ちちの影かげなき

われを問とふやみづからおごる名なを誇こほる二十四とせき時ときを人ひとをし恋こふる

ここすぎて夕ゆふ立たはしる川かわむかひ柳せんしゆ千せん株しゆに夏なつの雲うみのぼる

水み浴あみては溪たにの星ほしかけ髪かみほすと君きみに小百合せうりやくの床とこをねだりし

百合はくげがなかの紅べに百合りやくとしものたまふやをかし二人ふたりの君きみが子この母はは

誰れが子かわれにをしへし橋納涼十九の夏の浪華風流  
はしすゞみ なにはふうりう

露の路畑をまがれば君みえず黍の穂にこほろぎ啼きぬ  
もろこし

鳥と云はず白日虹のさす空を飛ばば翅ある虫の雌雄とも  
はくじつ はね めを

夏の日の天日ひとつわが上にややまばゆかるものと思ひぬ  
てんじつ うえ

百間の大き弥陀堂ひとしきり煙みなぎり京の日くれぬ  
ひやくけん

夕されば橋なき水の舟ふなよそひ渡らば秋の花につづく戸

母屋もやの方かたへ紅あけ三丈の鈴の綱つな君とひくたび衣きぬもてまゐる

君やわれや夕雲を見る磯のひと四つの素足すあしに海松みるぶさ寄せぬ

里さとずみに老いぬと云ふもいつはりの歌と或る日は笑めりと思せおぼ

きざはしの玉靴たまぐつ小靴をぐついでまさずば牡丹さくらちらむと奏さうさまほしき

恋しき日さもや侍さむらいらひなれし東椽とうえんの隅のはしらにおもかげ立たむ

ほととぎす岩山みちの小篋をぎょ二町深山みやまといふにわらひたまひぬ

あやにくに虫菌病むしぼむ子とこもりぬ鼓きこゆる昼の山の湯

君によし撫でて見よとて引かせたり小馬ましろき春の夕庭

花とり／＼野分の朝にもてきたる十人とたりの姿よしと思ひぬ

七なたりの美びなる人あり簾して船は御料ごりやうの蓮れんきりに行く



かしこうて蚊帳ぶんじょうに書かよむおん方かたにいくつ摘むべき朝顔の花

ふるさとやわが家君やが家草やながし松かへでも楓もひるがほの花

ほととぎす山門さんもんのぼる兄あにのかけ僧服そうふくなれば袖そでしろうして

よき箱と文箱とどめていもうとは玉虫飼ひぬうらみ給ふな

この恋こひびとをしへられては日記にきも書きぬ百合はくげにさめぬと画蚊ゑがに  
寝ぬねと

水にさく花のやうなるうすものに白き帯する浪華の子かな

春の池楼ろうある船の歩み遅々ちいと行くに慣れたるみさぶらひ人

夏花は 赤しゃくねつ 熱 病める子がかざしあらはに歌ひはばからぬ人

伯母をばいまだ髪もさかりになでしをかざせる夏に汝なれは生れぬ  
 (弟の子の生れけるに夏子と名をえらみて)

行く春にもとより堪へぬうまれぞと聞かば牡丹に似る身を知らむ

妻と云ふにむしろふさはぬ髪も落ちめやすきほどとなりにけるか  
な

われに遅れ車よりせしその子ゆゑ多く歌ひぬ京の湯の山

夕かぜや羅の袖うすきはらからにたきものしたる椅子ならべけり

わが愛づる小鳥うたふに笑み見せぬ人やとそむき又おもひ出ず

かへし書くふたりの人に文字いづれ多きを知るや春の染紙そめがみ

われぼめや十方じふぱうあかき光明のわれより出でむ期ごするものゆゑ

ふりそでの雪輪ゆきわに雪のけはひすや橋のかなたにかへりみぬ人

かけものゝ牛の子かちし競馬けいばのり梅にいこふをよしと思ひぬ

酒つくる神と注ちゆうある三尺の鳥居のうへの紅梅の花

われにまさる熱えて病むと云ひたまへあらずとならば君にたがは  
む

菜の花のうへに二階の障子見え戸見え伯母見えぬるき水ふむ

あやまちて小櫛ながし、水なればくぐるは君が花垣なれば

河こえて鼓凍らぬ夜をほめぬ千鳥なく夜の加茂の里びと

鹿が谷尼は磬うつ椿ちるうぐひす啼きて春の日くれぬ

くれなるの蒲団かさねし山駕籠に母と相乗る朝ざくら路

あゝ胸は君にどよみぬ紀の海を淡路のかたへ潮わしる時

まる山のをとめも比叡の大徳だいとくも柳のいろにあさみどりして

法華經の朝座あさざの講師かうしきんらんの御袈裟みけさかをりぬ梅さとちりぬ

いでまして夕むかへむ御轍みわだちにさざん花くわちりぬ里あたたかき

歌よまでうたたねしたる犯ほん人にんは花に立たせて見るべかりけり

うれひのみ笑みはをしへぬ遠とほびとよ死ねやと思ふ夕もありぬ

御供養みくやうの東寺舞樂とうじぶがくの日を見せ桜あけぼのふくなり京みやこの山やまかぜ

金色こんじきのちひさき鳥とりのかたちして銀杏ぎんぎよちるなり夕日ゆづりの岡おかに

紅梅べにうめや女をんなあるじの零落れいらくにともなふ鳥とりの籠かごかけにけり

大木たいぼくにたえず花はなさくわが森もりをともに歩あゆむにふさふと云いひぬ

しろ百合はくげと名なまをし君きみが常夏とこなつの花はなさく胸むねを歌嘆かたんしまつる  
み子の君きみに)  
(と

審判さばきの日をゆびきずくるとげにくみ薔薇ばらつまざりし罪とひまさば

山の湯や懸想けさうびとめく髪ながの夜姿よなりをわかき師にかしこみぬ

廊馬道らうめどういくつか昨夜よべの国くればうぐひす啼きぬ春のあけぼの

こゝろ懲りぬ御兄みあになつかしあざみては博士得ませと別れし人も

うへ二枚まいなか着ぎはだへ着舞扇ぎはさめる襟の五ついろの襟

きよき子を唾とつくりぬその日より瞳なに見るあきじひの人



ひとはるあきはるあき  
 人春秋ねたしと見るはただに花衣きぬに縫はれぬ牡丹しら菊

め  
 女さそひし歌の悪あくりやう 霊 人生みぬ髪ながければ心しませや

春の夜の火かげあえかに人見せてとれよと云へど神に似たれば

明けむ朝われ 愛あいぢやく 着 すす人よ見な花よ媚ぶなど袋に縫へな

にくき人に柑子かうじまゐりてぬりごめの歌問ふものか朝の春雨

よしと見るもうらやましきもわが昨日きのふよそのおん世は見ねば願は  
じ

酔ひ寝ては鼠がはしる肩と聞き寒き夜守りぬ歌びとの妻

手たぢからのよわや十歩とあしに鐘やみて桜ちるなり山の夜の寺

兼好を語るあたひに伽羅たかむ京の法師の麻の御みころも

かくて世にけものとならで相逢ひぬ日てる星てるふたりの額ぬかに

春の夜や歌舞伎を知らぬ鄙びとの添ひてあゆみぬあかき灯の街

玉まろき桃の枝ふく春のかぜ海に入りては眞珠生むべき

春いそぐ手毬ぬふ日と寺々てら／＼に御詠歌みえいかあぐる夜は忘れぬ

春の夜はものぞうつくし怨えんずると尋ひろのあなたにまろ寝の人

駿河の山百合がうつむく朝がたち霧にてる日を野に髪すきぬ

伽藍すぎ宮をとほりて鹿吹しかきぬ伶人れいじんめきし奈良の秋かぜ

霜ばしら冬は神さへのろはれぬ日ごと折らるるしろがねの櫛

鬼が栖むひがしの国へ春いなむ除目に洩れし常陸ノ介と  
ぢもく

髪ゆふべ孔雀の鳥屋に横雨のそそぐをわぶる乱れと云ひぬ  
とや よこあめ

廊ちかく鼓と寝ねしあだぶしもをかしかりけり春の夜なれば  
つゞみ

集しうのぬしは神にをこたるはした女か花のやうなるおもはれ人か

さは思へ今かなしみの酔ひごこち歌あるほどは弔ひますな

君死にたまふことなかれ

旅順口包圍軍の中に在る弟を歎きて

あゝをとうとよ、君を泣く、

君死にたまふことなかれ、

末に生れし君なれば

親のなさはまさはりしも、

親は刃やいばをにぎらせて

人を殺せとをしへしや、

人を殺して死ねよとて

二十四までをそだてしや。

さかひ  
堺の街のあきびとの

きうか  
旧家をほこるあるじにて

親の名を継ぐ君なれば、

君死にたまふことなかれ、

旅順の城はほろぶとも、

ほろびずととも、何事ぞ、

君は知らじな、あきびとの

家のおきてに無かりけり。

君死にたまふことなかれ、

すめらみことは、戦ひに

おほみづからは出でまさね、

かたみに人の血を流し、

<sup>けもの</sup>獣の道に死ねよとは、

死ぬるを人のほまれとは、

大みこゝろの深ければ

もとよりいかで思<sup>おほ</sup>されむ。

あゝをとうとよ、戦ひに

君死にたまふことなかれ、

すぎにし秋を父ぎみに

おくれたまへる母ぎみは、

なげきの中に、いたましく

わが子を召され、家を守り、

安しと聞ける大御代も

母のしら髪はまさりぬる。

暖簾のれんのかげに伏して泣く

あえかにわかき新妻にひつまを、

君わするるや、思へるや、



十月も添とつきはでわかれたる  
少女ごころを思ひみよ、  
この世ひとりの君ならで  
あゝまた誰をたのむべき、  
君死にたまふことなかれ。

恋ふるとて

恋ふるとて君にはよりぬ、  
君はしも恋は知らずも、  
恋をただ歌はむすべに

こころ燃え、すがた癩せつる。

いかが語らむ

いかが語らむ、おもふこと、

そはいと長きこゝろなれ、

いま相むかふひとときに

つくしがたなき心なれ。

わが世のかぎり思ふとも、

われさへ知るは難からし、

君はた君がいのちをも

かけて知らむと願はずや。

夢のまどひか、よろこびか、

狂ひごこちか、はた熱か、

なべて詞に云ひがたし、

心ただ知れ、ふかき心に。

鼓いだけば

鼓つづみいだけば、うらわかき

姉のこゑこそうかびくれ、

桂うちぎかつげば、華やぎし

姉のおもこそにほひくれ、

桜がなかに簾すだれして

宇治の河見るたかどのに、

姉とやどれる春の夜の

まばゆかりしを忘れめや、

もとより君は、ことばらに

うまれ給へば、十四まで、

父のなさを身に知らず、

家に帰れる五つとせも

わが家ながら心おき、

さては穂に出ぬ初恋や

したに焦るる胸秘めて

おもはぬかたの人に添ひ、

泣く音をだにも憚れば

あえかの人ほほゑみて

うらはかなげにもものいひぬ、

あゝさは夢か、短命たんめいの

二十八にてみまかりし

姉をしのべば、更にまた

そのすくせこそ泣かれぬれ。

## しら玉の

しら玉の清らに透るとほ

うるはしきすがたを見れば、

せきあへず涙わしりぬ、

しら玉は常にほひて

ほこりかに世にもあるかな。

人のなかなるしら玉の

をとめ心は、わりなくも、

ひとりの君に染<sup>そ</sup>みてより、  
命みじかき、いともろき  
よろこびにしもまかせはてぬる。

冥府のくら戸は

よみのくら戸はひらかれて

恋びとよよといだきよれ、

かの天<sup>あめ</sup>に住む八百星<sup>やほほし</sup>は

かたみに目路<sup>めぢ</sup>をなげかはせ、

土にかくれし石屑<sup>いしくづ</sup>は

皆よりあひて玉と凝れ、

わが胸こがす恋の息いき

今つく熱きひと息いきに。



## 青空文庫情報

底本：「恋衣 名著復刻 詩歌文学館」日本近代文学館

1980（昭和55）年4月1日発行

底本の親本：「恋衣」本郷書院

1905（明治38）年1月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の旧字を新字にあらためました。固有名詞も原則として例外とはしませんでしたが、人名のみは底本のままとしました。

※変体仮名は、通常の仮名にあらためました。

※底本中で脱漏や誤りの可能性がある点については、「與謝野鉄幹・與謝野晶子集 明治文学全集51」筑摩書房、1968（昭和43）年、「與謝野寛 與謝野晶子 窪田空穂 吉井勇 若山牧水集 日本現代文学全集37」講談社、1964（昭和39）年を参照し、補訂しました。

入力：武田秀男

校正：kazushi

2004年6月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 恋衣

山川登美子・増田雅子・與謝野晶子

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>